

カイロ郊外にある3大ピラミッドの近く。その建設に携わったとされる労働者の住居跡などで発掘作業をしている。専用のコテで土を掘っては取り除き、写真を撮ってはまた掘る。次々と見つかる土器や石器のかけら、動物の骨……。

「ピラミッドを見ながら発掘していると、夢がなかったんだと実感する」と目を細める。エジプトで発掘にかかわ

# 人が世界が舞台

矢羽多 万奈美さん 43

って5年になる。小学4年の時、ピラミッドの作り方を解説していたテレビ番組を見たのがきっかけで、エジプトに惹かれた。「古代人ってすごい」

その後、エジプト関連の本を読みあさった。いまだに多くの謎が残っている古代エジプト。「人々がどんな風に暮らしていたか、もっと知りたい」。思いは募った。



## 4500年前の息吹に思いはせ

日本で大学を卒業した後、会社勤めも経験したが、エジプトのことが頭から離れない。28歳の時、エジプト学の盛んな英リバプール大学に入り、古代エジプトの象形文字を学び、古文書などを研究した。大学院修了前には半年間、指導教授のついで、カイロの考古学博物館で研究員となり、文化財漬けの日々を送った。

### ■ エジプトの遺跡で発掘を続ける研究者

**略歴** 1966年11月生まれ。福岡県出身。92年国学院大卒。保険会社員や東京都新宿区の遺跡発掘調査員などを経て、97年に英リバプール大学で修士号を取得。趣味は音楽鑑賞。大学時代にはバンド活動にも参加していた。

そのままエジプトに残りたいと思ったが、働き口が見つからずに断念。チャンスが訪れたのは5年後だった。カイロ郊外に新設された大学が日本語講師を募集していると知り、迷わず応募した。再び暮らしたエジプト。そこで日本人の友人に誘われ、米国人考古学者率いる遺跡の発掘調査隊に参加した。子供のころ、漠然と抱いていた夢が現実になった。

2006年冬には、交易品などを封印するために使われていた「封泥」と呼ばれる直径数センチの塊を発掘現場で見つけた。3大ピラミッドの一つを作らせたと思われるカフラー王の別名が象形文字で書かれた印章の跡や、古代人の指紋もはっきりと分かる。約4500年の時を超え、目の前に現れた遺物。「ずっと昔、私と同じように食べ、寝て、働いていた人がここにいた。そう思うと胸がときめいた。現在は比較的気候のよい冬に発掘隊に参加し、猛暑の夏は日本語教師などで生計を立てる。いくら掘っても終わりがなくと言われるエジプトの遺跡。現場で発掘を続けたいと強く思う。一方で、考古学をさらに極めたいという思いもある。「いつか自分がエジプトでやってきたことを、何かの形でまとめることができれば」と意気込む。

(カイロ 田尾茂樹、写真も)

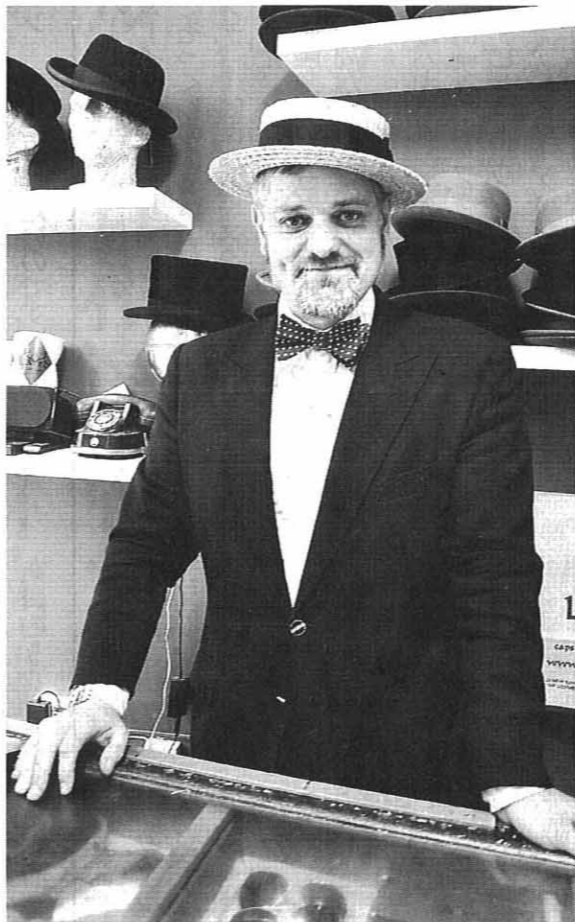
# YOMISAT

ヨーロッパ

欧州衛星版購読申し込み・問い合わせ先  
OCSロンドン ☎(020)7640-3999 OCSフランス ☎(01)4945-8105

欧州総局・ロンドン支局 ☎7353-6952  
パリ支局 ☎4494-9494  
ベルリン支局 ☎2045-2600

ブリュッセル支局 ☎285-0868  
ジュネーブ支局 ☎733-5138  
ローマ支局 ☎482-1835  
アテネ支局 ☎801-3215  
モスクワ支局 ☎981-4110



アレックス・トランショーさん

## 紳士のおしゃれ追求

### 帽子職人トランショーさん

#### 英国の職人芸

ロンドンに2軒の帽子店「レアーデ・ロンドン」を構えるアレックス・トランショーさん(36)は自身が帽子職人でもある。ツイードの鳥打ち帽、シャローック

・ホームズで有名な鹿打ち帽、チャーチル元首相も愛用したボンブルグ帽、名門ハーロー校の制服でもあるカンカン帽といった定番の男性用帽子に加え、同店オリジナルの帽子も店で販売している。

「レアーデ・ロンドン」は2009年、ロンドン東部にある花市場で有名なコロムビア通りに1号店を開

き、今年、中心部の繁華街コベントガーデンに2号店を開いた。共に壁は赤が基調で、鏡が多く使われ、棚はアンティーク。モダンな貴族の館といった風情だ。扱っている帽子で定番のものには老舗メーカーのものが多い。ベレー帽を本家スペインのバスク地方から取り寄せるなど、こだわり派だ。

「男性は女性より帽子のおしゃれに消極的。怠惰であってはいけない。野球帽は20歳を過ぎたら卒業してもらいたい」と言う。その上で、「伝統的な英国紳士の帽子を気軽にかぶってもらいたい。色々な帽子をそろえて、毎日違うものを楽しんでほしい」と提言する。具体的なアドバイスはこうだ。

「例えば山高帽。特定の人のものというイメージが強いけれど、Tシャツにジ

## 「気軽に自由にかぶって」

「帽子を斜めにかぶったり、前後を逆にしたりしても良い。かぶり方次第で全然違う雰囲気になるし、服とのコーディネートも無限にできる」

ロンドン生まれ。会計士だった父親がともにおしゃれで、いつも山高帽をかぶって仕事にでかけていた。「シャツにはカフリンクス、手には傘。父からはダンテイズムを大いに学んだ」と振り返る。父の影響で幼い頃から帽子に興味を持ち、10代半ばで独学で帽子作り始めた。プリストル大学では古典を学び、卒業後はナイトクラブのプロモーターなどを経験したが、帽子作りへの情熱は冷めず、ロンドン・カレッジ・オブ・ファッションに入って正式に学んだ。

「帽子が大好き。手縫いをしていくと心が落ち着く」「英国らしさ、英国ならではの仕上げを大切にしたい」

次の目標は決まっている。「店の半分を工房にして若い職人を雇い、オーダーメイドの帽子を本格的に作っていききたい」

「レアーデ・ロンドン」の帽子がトレンドになる日は遠くなくそうだ。

(文と写真 南崎智子)



Laird London  
コロムビア通り店  
128 Columbia Road,  
Shoreditch, London E2 7RG  
コベントガーデン店  
23 New Row, Covent  
Garden, London WC2N 4LA  
照会 ☎020・7240・4240か  
www.lairdlondon.co.ukへ